十一面千手観音像　一軀　脇立四天王像　四軀

【所　在　地】出水市野田町下名八幡　感応寺
【種　　別】県指定有形文化財（彫刻）
【指定年月日】昭和 38 年６月 17 日

感応寺の本尊として伝わる十一面千手観音で，坐高 81.6cm。台座の高さ約１ m。漆を塗ってその上に下地として彩色をしていたがはがれ落ちている部分が多い。左右に持国・増長・広目・多聞の四天王像が安置され，本尊と同巧の作で木彫に彩色がほどこされている。

明治のはじめに廃仏毀釈にあい，一時隠されていた。その後，元に復し，その際補修・彩色がなされたという。

千手観音像は平成元（1989）年に京都美術院で修理され像の面部裏に「文安二年日　院隆サク」という墨書が見つかり，文安２（1445）年に院隆という仏師の作になるものであることがわかった。

また，千手観音は千手千眼観音とも呼ばれるように各手の 掌 に眼を描いていることが多いが，この像は玉眼が嵌入（はめこむこと）されているという特異な技法を施している。

四天王像も同巧のもので院隆の作である可能性は高いと考えられる。

〈参考〉

●千手観音　頭部に 11 の顔をもち，前方３面が菩薩面，右側３面が牙上出面，左３面が瞋怒面，後方一面が大笑面，中央頂上に仏面をつくる。

千手は，仏陀が一切衆生を救済するため千の目と千の手を得たいと願ったことに由来するもので，千は満数でその慈悲の広大無辺なることを表わしている。